

| | |
|-------------|---|
| Title | [書評] アズイズ・アティーヤ (1968) 『東方キリスト教の歴史』 ロンドン |
| Author(s) | 曾我, 篤嗣 |
| Citation | 東方キリスト教世界研究 = Journal for area studies on Eastern Christianity (2017), 1: 75-86 |
| Issue Date | 2017-05-01 |
| URL | http://hdl.handle.net/2433/227781 |
| Right | |
| Type | Departmental Bulletin Paper |
| Textversion | publisher |

書評

アズィズ・アティーヤ (1968) 『東方キリスト教の歴史』 ロンドン*

Atiya, Aziz S. (1968) *A history of Eastern Christianity*, London.

曾我 篤嗣 SOGA Atsushi

京都大学大学院文学研究科修士課程

I. 概要

本書評ではアズィズ・アティーヤ (1898-1988) の『東方キリスト教の歴史』を取りあげる。本書はカルケドン公会議で異端とみなされた東方諸教会の歴史について、これらの教会が辿った歴史や各教会の神学的な特徴を網羅的に記したものである。本書は日本でも馴染みが薄いこれらの研究分野の概説書としての意義を持つと評者は考えるが、2014年に村山盛忠によって日本語訳も刊行された。このことに関してはII章で詳述する。

次にこの書評の構成を説明すると、まず第I章において本書の概要を記し、第II章においてその意義を記す。そして第III章においてそれらを総括する。

本書ではエジプトやシリアをはじめとした中東地域やアルメニア、エチオピアなどの諸地域に現存する、ないしは現存していた教会が取り上げられ、以下のように七部に分けられて構成されている。

序文

第一部：アレクサンドリアのキリスト教 コプト(人)とコプト正教会

第二部：アンティオキアとヤコブ派教会

第三部：ネストリオス派教会

第四部：アルメニア教会

第五部：南インド聖トマス・キリスト教会

第六部：マロン派教会

第七部：消滅した教会・結語

序文においては、東方キリスト教教会にはキリスト教信仰形成期の重みや世紀をまたいだ継承性といった要素が見られ、これらの事実をありのままに記していく、という著者アティーヤによる表明が書かれている。東方キリスト教教会の中でもアティーヤは「古代の非ギリシア系教会」(ancient non-Greek family churches) についての講義を行っていたこともあり、これらの教会の概要

* Atiya, Aziz S. (1968) *A history of Eastern Christianity*, London: Methuen. (日本語訳：アズィズ・S・アティーヤ著、村山盛忠訳 (2014) 『東方キリスト教の歴史』 教文館)

について一巻本として刊行することを承諾した。また本書で取り扱う資料については基礎的なもののみであり、詳細な研究に関しては注において広範な図書目録を示すことでもって補足をしたと述べられている。アティーヤは東方教会に関しての著書を二つのカテゴリーに分けた。一つ目はローマ・カトリックの著者たちによるものである。彼はこれらの著者について、幾人かの著者が優れていることを認めながらも、「概ねすぐれた学識を備えた学者たちだが教派的熱情と寛容性を欠いた教義の信条的観点から東方世界を扱っている」(Atiya 1968: xiii, アティーヤ 2014: 5) と批判的に評している。二つ目はプロテスタントの著者たちによるものである。彼らについてアティーヤは「東方教会に善意と共感を持ってはいるが、東方キリスト教徒の「プリミティヴィズム」(primitivism)〔素朴な純粋性に究極的価値判断を置く〕の本質を心から理解するに至ってない¹」(Atiya 1968: xiii, アティーヤ 2014: 5) と批判した上で、1960年代当時の旧世代の学者についてはその都度該当箇所を参照するが、現代思想に基づいた教会史家については非ギリシア教会が軽視されていると述べた。最後にアティーヤは本書について、歴史家とコプト正教会の教徒という自負を持って表したものであり、「強調したい出来事に関していささか異なった視点から考察」(Atiya 1968: xiii, アティーヤ 2014: 6) したものであると述べている。従来は西方キリスト教徒の視点による研究が中心的であったが、彼の言う「東方教会の群れの中から」(Atiya 1968: xiii, アティーヤ 2014: 6) という意識に基づいて本書は記されたと言えよう。

第一部においては、コプト正教会とエチオピア教会について、それぞれ七章と一章を用いて述べられている。ここでは、まずコプト正教会の歴史と文化を概観する。またコプト正教会とは別物のように思われるエチオピア教会についても、アティーヤは、エチオピア教会の歴史的背景としてコプト正教会の主教がエチオピア教会を管理していたという歴史的事実に基づいて、コプト正教会と重なる範囲に関しては省きつつ、その他の面に関しては詳しく述べている。

まず、第一章において、コプト正教会はキリスト教通史において「長年軽視され時に忘れ去られてきたが、これはコプト自身が忘却の道を選んだ故である」(Atiya 1968:17, アティーヤ 2014:31) と述べ、西方教会の権威から距離を置き、コプトの伝統と民族的誇りを堅持するよう努めた、としている。コプトを含む古代のキリスト教徒が再発見されるのは十九世紀になってからであり、コプト語史料の組織的得研究が始められたのはごく最近になってからである。アティーヤはこれらのコプト正教会研究を以下の三つに分けた。第一の学派は、プロテスタント学派であり、コプト正教会への思い入れと理解力との乖離が激しい。第二の学派は、ローマ・カトリック学派であり、コプト正教会への敵対的姿勢を崩さない。第三の学派は、地元学者によるものであり、原資料に基づいた客観的研究を行っている。

このようにコプト正教会の研究を位置づけたアティーヤは、コプト史の側面を紹介するために歴史的事実をできる限り客観的に検証していく。まずは「コプト」という単語の歴史的由来とコプト語の歴史について概観し、キリスト教以前の古代エジプトにおける宗教について述べている。

¹ [] 内は日本語に翻訳した村山による注

三位一体や復活、十字架などといった様々なキリスト教的要素と古代エジプトにおけるそれと類似した要素とを詳細に記述し、この土着宗教がエジプトにおけるキリスト教定着に大きな役割を果たしたことを示した。

第二章において、「コプト教徒は彼らの民族教会の使徒伝承性を誇りにしており」(Atiya 1968: 25, アティーヤ 2014: 47), 現在においてもキリストの弟子である聖マルコを初代総主教と考えていることをアティーヤはまず指摘する。この聖マルコから始まるコプト正教会は、ローマ帝国からの迫害を受けた時期においても多くの殉教者を出したが信仰のために「隠れることなく闘い、堂々とした地で殉教の冠を授かった」(Atiya 1968: 33, アティーヤ 2014: 56)。このような迫害の時期を乗り越えた古代キリスト教はアレクサンドリアなどに教理校を設立し、オリゲネスやディオニュシオスなどの偉大な指導者を輩出した。しかし、ローマ帝国による公認以後、キリスト教から「グノーシス主義」や「アレイオス主義」といった分派が生まれ、次第に分裂の様相を呈してきた。これらの分派は公会議において異端と見なされ、その後第三回のエフェソス公会議においてコンスタンティノポリス総主教ネストリオスとアレクサンドリア総主教キュリロスとの対立により、ネストリオスが追放され、またキュリロスの主張から、キリストの神性と人性の合一を主張する単性説教理が確立するに至った。

第三章においては、キリスト教の布教という点に着目し、コプトの伝道活動について様々なことが指摘されている。後述するヌビアやエチオピアなどの福音受容のみならず、ヨーロッパにおいても布教がなされていた。また「エキュメニカル(教会一致)運動」(oecumenical movement)が315年ニカイア公会議から451年カルケドン公会議にかけて行われ、そこで「アレクサンドリアの霊的で知的な指導性が発揮された」(Atiya 1968: 56, アティーヤ 2014: 87)とアティーヤは主張する。しかしながら、両性説に傾きつつあったローマ側がカルケドン公会議を召集し、アレクサンドリア司教を断罪し、コプト正教会を単性説派であると見なした。アティーヤはこの出来事に関して、単なる聖書解釈の相違ではなく、アレクサンドリア総主教や教皇、あるいはコンスタンティノポリス司教や皇帝に至るまでの様々な教会関係者間の政治的戦略や利害関係が複雑に交差したことによる、というコプト正教会側の見解を紹介している。またカルケドン公会議以降エジプトの民族意識が急速に生まれたことも指摘する。このような民族意識についてはコプトの修道会にも見られ、ギリシア的概念を持つコプト典礼の一掃を行うなどした。

第四章においては、カルケドン後のキリスト教の状況と、「ヘノティコン」(統一令)や「キリスト単意説」のような教会一致の試みの失敗について、コプト側から書かれている。これらの試みは東ローマ帝国の意向の下行われたことにより、コプト正教会側の不信感を招き、「古代教会の兄弟関係の断絶」(Atiya 1968: 78, アティーヤ 2014: 117)がさらに広がっていった。

第五章においては、アラブによるエジプト支配の歴史的状況について書かれている。アラブ支配の初期におけるコプト教徒は他のキリスト教徒と同様「啓典の民」と見なされ、ローマ支配下の時代における抑圧から解放された。またこの時彼らが「民族的特徴、教会への揺るがぬ忠誠心、先達者の信仰の歴史的な不動性、また社会構造に密着した存在」(Atiya 1968: 84, アティーヤ

2014: 126) の獲得を達成したとアティーヤは高く評価する。その後十字軍の到来までの五世紀間にコプト正教会の順調に勢力を伸ばしていった。しかしながら十字軍の到来に伴い、カルケドン信条に無知なムスリムはコプト教徒を十字軍の協力者と見なし、彼らに重税を課した。十字軍の敗北によりコプト教徒への重税は解かれたが、十三世紀に成立したマムルーク朝は宗教的背景に関わりなく、異邦人であるコプト教徒を迫害した。また十五世紀にはローマ教会とコプト正教会ならびにアビシニア教会（エチオピア教会）の間で、関係回復を目的としたフェラーラ・フィレンツェ公会議が開かれたものの、失敗に終わった。

第六章においては、マムルーク朝滅亡後にエジプトを支配したオスマン・トルコやフランス、またエジプト独立後 1960 年代に至るまでのコプト正教会情勢について記される。オスマン・トルコの時代においては、コプト教徒が引き続き官吏として徴用され、彼らの中には非常に敬虔であった人がいたことのみが述べられている。続くフランスのエジプト遠征期において近代西欧思想を獲得したコプト正教会は、十九世紀に教育と教会の両面において改革を行い、コプト正教会の聖書や典礼を印刷し、教会や家庭に配った。一方でカトリックやプロテスタントによる布教も進んだ。これについてアティーヤは「彼らのコプト正教会に及ぼした衝撃は、長期の眠りから目覚めさせ現代に目を向けさせた」（Atiya 1968: 113, アティーヤ 2014: 163）と評している。二十世紀に入ると、ようやくコプトの考え方が見直され、カルケドン公会議以降停滞していた「エキュメニカル運動」が再び動き始めた。アティーヤはこれについて、「姉妹教会との再会に、大きな期待感を」（Atiya 1968: 59, アティーヤ 2014: 90）抱いたと語っている。これらのエキュメニズムについては、本書が書かれた 1968 年当時においては大いに期待されたことであった。

第七章においては、コプト正教会の位階制（ヒエラルキア）、儀式と典礼、コプト美術、コプト建築、コプト音楽、コプト語文書について具体的事例に基づいて精緻に記されている。これらの各項目におけるコプトの独自性や後世に与えた影響などが述べられている。

続く第八章ではエチオピア教会について述べられている。まず今日におけるエチオピアの状況が述べられ、エチオピアにおけるコプト教義への信奉心が民族的な心情と深く関わっていることに触れられている。次いでエチオピアの歴史的背景について書かれ、キリスト教が伝わってから現代に至るまでの歴史について、キリスト教との関係にも少し触れながら述べられている。教会に関しては、エジプト出身のコプト正教会修道士がエチオピア教会首長に就任する三世紀以来の慣行についてまず書かれ、次いで五世紀のカルケドン公会議時の単性説支持の表明、その後周辺地域をムスリムが支配したことによるイスラム教との争い、十六世紀から十七世紀にかけてのイエズス会のエチオピア布教、そして十九世紀のプロテスタントによる布教について触れられている。他宗派による布教活動を通じてもなおエチオピア教会はコプト正教会と「変わることなき強い絆で結ばれて」（Atiya 1968: 157, アティーヤ 2014: 219）いる。章の最後ではエチオピアの信仰と文化について触れられており、コプトの影響が見られるほか、慣習のいくつかはユダヤ教と共通点を持っていることが記されている。ただ、教会自体は変わりゆく世界情勢の中で自立を図っており、従来保守的であったエチオピア教会の変革をアティーヤは期待している。

第二部ではまず第九章において、アンティオキアという街が初期キリスト教において果たした役割の大きさについて述べられている。この時代においてはグノーシス派を論駁したテオフィロスらが活躍した。次いでニカイアからカルケドンにかけてのアンティオキアの位置について述べられている。ニカイア公会議においてはコンスタンティノポリスとアレクサンドリアの総主教と並びアンティオキア総主教が重要な位置を占めていた。第三回のエフェソス公会議後最終的にはアンティオキアとアレクサンドリアが手を結び、異端と見なされたネストリオスを追放した。ネストリオス派については第三部において述べられている。しかしながら続くカルケドン公会議において状況は一変する。当時の皇帝が「コンスタンティノポリス総主教に「新ローマ」の地位を完全にもたらした」(Atiya 1968: 178, アティーヤ 2014: 244) のである。これに対しアンティオキアの司祭と信徒たちは単性説に傾き、「民族意識の高まりと一体化した宗教的傾向」(Atiya 1968: 178, アティーヤ 2014: 245) が次第に波及した。カルケドン以降の単性説派の主唱者には総主教セウエロスがいるが、彼の死後アンティオキア総主教座は二つに分かれ、一つはギリシア正教に移行し、もう一つは単性説派として活躍した。後者が第二部において取り上げられる「ヤコブ派」である。これはヤコブ・バラダイオスという六世紀の人物によって立ちあげられたものであり、彼の努力によりシリアの単性説派教会は存在感を示し続けたとアティーヤに評されている。その後禁欲主義に基づいた教えが形作られていった。

第十章においては、その後のヤコブ派について記されている。アラブによる支配が行われた時代においてヤコブ派教会はコプト正教会同様比較的平穏に過ごした。七世紀から十世紀にかけての時期は修道院を中心に学問の探求が行われ、またアルメニアなどへの布教も進められた時期であった。しかしセルジューク朝の侵攻以降は、十二世紀から十三世紀にかけてのバル・ヘブラエウスら三人の偉大な人物の登場によりヤコブ派文書が復活を遂げたことを除き、ヤコブ派は衰退していった。この過程においてモンゴル人がシリアに侵攻し、モンゴルのイスラームへの改宗とそれに伴うキリスト教の迫害が行われた。その後地域の支配者が変わりゆく中、ヤコブ派はムスリムやクルド人、トルコ人との平和的共存を試みる方向性を取った。その過程で宗教教育の側面が失われつつあったが、十九世紀以降、西欧世界の宣教師に頼ることにより、状況の打開を行い、再びかつての栄光を取り戻そうとしている。

第十一章においては、ヤコブ派の信仰と文化について記されている。儀式と典礼に関してアティーヤは古代キリスト教の特徴がよく表れていると見なし、ヤコブ派の美術と建築に関しても、アティーヤはヤコブ・バラダイオス以前のものを含めて考えるべきだと主張する。彼は北シリアの人々もナショナリズムの気運をもち、ビザンツによって追い出された西シリア人と同一の人種として考え、北シリアの建築を高く評価した。

第三部においては、ローマ帝国とペルシャ帝国に挟まれていた時代から、教会をたてて生きる「東シリア人」による教会である、ネストリオス教会(別名: 東シリア教会)が取り上げられている。まず第十二章において、この名前自体は五世紀のエフェソス公会議において異端とされた、コンスタンティノーブル司教ネストリオスに基づいてはいるが、教会の歴史自体は四世紀頃のシ

リア教会の東西分裂に端を発する。彼らはギリシア的宗教権威を否定しながら、同時にギリシア的思想を用いた教会づくりを進めており、両性説派に傾倒していった。彼らはギリシア人に追放されたことによって、ペルシャに移り住み、東への宣教を積極的に行った。彼らについての先行研究は衰退した分派という見方でネストリオス派をとらえているものが多く、アジアのキリスト教史に位置付けられているとアティーヤは指摘する。それに対して彼はアッシリアの伝説がシリアのキリスト教成立を使徒時代に位置付けていることを紹介する。そこには「アッシリア・キリスト教」のルーツが古代に深く根ざしているという確固たる姿勢」(Atiya 1968: 245, アティーヤ 2014: 334)があると彼は指摘する。一方歴史上の起源についてはシリア教会分裂以前の「シリアの聖エフライム」などの功績を取り上げ、ネストリオスの追放までの司教について書いている。またサーサーン朝の支配の下、迫害があったものの教会内部の混乱は収まり、ネストリオス派は次第に大きくなっていった。

第十三章においては、ネストリオス教会が行っていた海外への宣教について詳述されている。彼らはアラビア、中央アジア、中国などに宣教を行った。アラビアにおいては四世紀から九世紀にかけてネストリオス派が布教していたが、ムスリムの台頭により完全に消滅した。中央アジアにおいては五世紀から十四世紀頃までネストリオス派の普及の痕跡が見られる。しかし、ティムールの西アジア征服以降状況が悪化し、完全にこの地域から消滅した。中国においては、七世紀から十五世紀にかけて存在したが、中央アジア同様迫害により消滅した。その他インドにおいては「マール・トマ教会」としてネストリオス派教会が現存している。

第十四章においては、サーサーン朝滅亡からイスラームやモンゴルの支配を経てティムールが台頭するまでのネストリオス派の動向について記されている。イスラームの支配時期におけるネストリオス派は最盛期にあり、当時禁じられていた会堂の建築にいそしんだ。また総主教争いも盛んであり、賄賂が横行していた。十二、三世紀にはカリフ体制が限界を迎えており、モンゴルの侵攻によってネストリオス派の状況も大きく変わった。シリアを支配したイル・ハーン朝はイスラム教に改宗し、十四世紀初めにはアラブ人とクルド人によるネストリオス派虐殺が行われた。さらに同世紀のティムール朝により虐げられたネストリオス派は身を隠すことを余儀なくされた。

第十五章において、隠匿後から現代に至るまでのネストリオス派教会の様子が記されている。ネストリオス派教会は十六世紀にカトリックとの接触により、一部の派閥がカトリックを信仰し、「帰一教会」を新たに設立した。残ったネストリオス派教会の人々は十九世紀に西欧世界の宣教師が介入するまで形式主義に陥っていた。西欧の宣教師によるネストリオス派教会の保護の要請が対ムスリムという政治問題に発展し、近隣に住んでいたクルド人との深刻な対立へと繋がった。その後第一次世界大戦期にトルコからの独立を決意したネストリオス派は「対トルコ統一戦線」に身を投じ、独立を試みた。しかしながら、これは失敗に終わり、彼らは最終的に虐殺され、残った人々もアメリカに移った。

第十六章においてはネストリオス派の信仰と文化について書かれ、とりわけ彼らの信仰が保守的であることが強調されている。また美術や建築やシリア語文書に関しては十三世紀までのもの

が取り上げられている。

第四部においては、数々の大国の侵攻に耐えながら、独自の民族アイデンティティを保ち続けたアルメニア人と、独自の位置にあるアルメニア教会が取り上げられている。彼らは小国ならではの様々な工夫でもって独立的地位を保つことに成功している。まず第十七章においてはアルメニア教会の紹介の前提となる、アルメニア自体の歴史的背景が書かれている。アルメニア人は二十世紀まで中東諸国やヨーロッパなど、世界各地に離散しながらも、アルメニア人であることに固執した。その理由として、言語と宗教が決定的な要因となっていることをアティーヤは強調している (Atiya 1968: 305, アティーヤ 2014: 415)。アルメニア人の居住領域は東西勢力の通過領域に当たるがゆえに、中世から十九世紀にいたるまで、ギリシア、トルコ、ペルシャ、アラブ、モンゴル、エジプトといった多くの国々から侵略を受けていた。こうした地政学的特徴がアルメニアの歴史形成に影響を与えてきたとアティーヤは分析している (Atiya 1968: 306, アティーヤ 2014: 416)。歴史的あるいは政治的観点では、アルメニア人は多くの大国の支配の下、アルメニアの民族意識を常に持ち続け、自らのナショナリティーを堅持しようと考えてきた。

第十八章においてはアルメニア教会の歴史のうち、草創期から七世紀のアラブ侵攻以前までのものを、それぞれの時代を支えた司教や宣教師の動向を中心に記述している。まずアティーヤはアルメニア史を理解するためにはアルメニア教会史の理解が欠かせないことを強調する。その理由として、彼らが独自性と文明を保ち、「外国支配による吸呑同化を断固、拒否した」(Atiya 1968: 314, アティーヤ 2014: 424) ことにあると彼は主張する。まず伝承によるとアルメニアには比較的早い段階からキリスト教宣教師が訪れていたという。アティーヤ (Atiya 1968: 316, アティーヤ 2014: 428) によると、四世紀のアルメニア教会の使徒である「開明者聖グレゴリオス」以前にアルメニアにキリスト教徒が既に存在していたということがアルメニア人著述家の前提となっている。記録に残されているものの中では、聖グレゴリオスが活躍した四世紀頃が最も古い。当初は多くのキリスト教改宗者が時のアルメニア皇帝により迫害された。しかし、皇帝のキリスト教改宗により、キリスト教は国家の庇護のもと急速に発展し、グレゴリオスがアルメニア教会の総主教に任じられ、かくしてアルメニアは世界で初めてキリスト教を国教とした。ただ、聖グレゴリオスが総主教を務めていた時代は、貴族の間ではキリスト教が広まっていたが、民衆宗教ではなかったことをアティーヤは指摘する (Atiya 1968: 321, アティーヤ 2014: 434)。キリスト教が民衆に広まるのは、五世紀以降のことであり、アルメニア文字の考案がその契機となった。ここから聖書がアルメニア語で記述され、礼拝においてもアルメニア語聖書が用いられるようになった。また賛美歌などもアルメニア語に訳された。451年のカルケドン公会議の際、ペルシャの迫害によりアルメニアが危機に立たされたことから、採択の決定は先送りにされたと思われる (Atiya 1968: 326, アティーヤ 2014: 439-440)。最終的には506年にアルメニア教会の全司教が招集され開催された教会会議により、カルケドン信条を採択しないことが定められた。

第十九章においては、七世紀のアラブ侵攻から現代に至るまでのアルメニア教会の動向が記されている。アルメニア教会もネストリオス派やエチオピア教会などと同様に、ローマ・カトリッ

クやプロテスタントによる改宗競争の下に置かれてきたという事実が浮き彫りになっている。アラブ支配の時期においては、他の東方諸教会と同様に「啓典の民」として単性説を説くことが自由にできるようになった。とはいうものの、完全に自由であったわけではなく、司教座をアラブに掠奪され、教会内部における分派も度々生じた。しかし続くセルジューク朝の時期には他の非カルケドン派同様虐げられ、国民は散り散りになり、国家としてのアルメニア王国は小アジアのビザンツ駐屯地からキリキア山脈にかけての地域に追いやられた。同じ頃十字軍が結成され、アルメニアは彼らと手を結んだ。ラテン人である彼らとの接近は宗教的接近をももたらしたが、アルメニア教会の聖職者の反対により、帰一は実現しなかった。この間五つの総主教ができ、アルメニア教会の世俗化も進んだ。十八世紀にはローマ・カトリックがアルメニアとの合同を誘ったが、再びアルメニア側は断り、翌十九世紀にもプロテスタントの宣教師がアルメニアを訪れたものの、アルメニア側はプロテスタント改宗者の処罰を行った。この時期から翌二十世紀にかけてアルメニアのナショナリズムが起り、トルコによるアルメニア人虐殺が行われた。これについてアティーヤは「教会においても国家においても、アルメニア人であることの見方は、教育、社会奉仕、医療活動の分野における（カトリックとプロテスタント）宣教師の献身的な働きに負う」（Atiya 1968: 341, アティーヤ 2014: 457）ところが多いと述べている。

第二十章では、アルメニアにおけるキリスト教のあり方と民族意識の独自性の観点を強調しながら、このアルメニアの独自性から生じてきたものとして「典礼とアルメニア儀式」、「ヒエラルキア」、「文学」、「美術と建築」の各項目に分けてアルメニア教会の信仰と文化について具体的に記述されている。宗教儀式にアルメニア語を採択し、独自のアルファベットを発案することによってアルメニア語聖書を訳出したことにより、教会の自立と民族主義の形成が比較的早い時期に進んだ（Atiya 1968: 342, アティーヤ 2014: 461）とアティーヤは主張する。これによりアルメニア人以外がアルメニア教会の成員をなすことが疑問視され、またアルメニア人の改宗も極めて異例なことだと見なされるようになった。こうしてアルメニア教会では、宗教と民族との一体化が進み、他の教会では見ることでできない独自の路線を歩んだ。

第五部においては、南インド聖トマス・キリスト教会について記されている。まず第二十一章においてこの教会の歴史が記される。二世紀末には南インド地域に既にキリスト教徒が来ており、彼らが使徒聖トマスの伝説に基づいた諸教会を建て、これにより「聖トマス」の名が冠されるようになった。また五世紀半ば頃には聖トマス・シリア教会が誕生し、ネストリオス派の布教活動によりその勢力は拡大していった。十六世紀のインド「発見」以後、ポルトガルのインド支配により、東方キリスト教を信奉する人々を改宗させる動きが発生した。この動きを拒否したインドのキリスト教徒は地下活動を行わざるを得なくなった。インドのキリスト教徒は民族的情熱を伴う激烈な教理論争を行わず、カルケドン信条等の論争に関心を抱かなかった。カトリックを堅持するインドのキリスト教徒のグループは廃れたが、英国のインド支配時代にプロテスタントと関わりを持つキリスト教徒の集団が生まれた。そしてその後の歴史に関しては、近年インド国内のキリスト教徒間におけるエキュメニズムの動きが発生したことが触れられており、アティーヤの

主張がこの項目においても反映されている。

続く第二十二章においては、南インドのキリスト教徒の社会生活と信仰生活が記される。彼らはアンティオキアのヤコブ派教会の教えに忠実であることが主に述べられている。

第六部においては、マロン派教会が書かれている。まず第二十三章ではレバノンにおいて広まったカトリックの教会であることが説明される。カトリックの教会が東方諸教会に含まれる理由は、かつて単性説を採っており、カトリックから派遣された主教ではなく、自身で立てた主教を中心とした組織づくりがなされ、古代シリア語の典礼を維持し、教会員がヤコブ派などと並ぶシリア人グループの一員である「マロン派」を名乗るためである。マロン派教会はまず十字軍に与するためにカトリックを受け入れ、中世後期ないしは近代においてローマ・カトリックに加入したとされている。

第二十四章においては、誕生から近代までのマロン派について説明されている。レバノンにおけるキリスト教は四世紀の聖マローにその起源を持つ。聖マロー修道院を建てた彼らは単意説を採り、自分たちの総主教を立てた。十字軍の到来以前に「民族的独自性が確立」(Atiya 1968: 397, アティーヤ 2014: 532) されたとアティーヤは説明している。十字軍を自身の救済者と考えたマロン派は十二世紀にローマ教皇への帰順を誓ったが、シリア語典礼を継続していた。カトリックの下にしながら東方の典礼を行う現在の形式が認められたのは十九世紀になってからであった。

第二十五章においては、近現代のレバノンにおけるマロン派の動向について書かれる。まずマロン派とイスラーム教のドゥルーズ派の関係について書かれている。彼らは当初上手くやっていたが、レバノンを統治していたトルコがキリスト教徒を差別的に取り扱い、憎悪を引き起こした。次いで1860年代に「六〇年代大虐殺」と呼ばれるキリスト教徒虐殺が起こり、フランスの干渉を経てマロン派は何とか復権した。そしてレバノン独立期にレバノンのキリスト教徒は「祖国とマロン派教会を同一視」(Atiya 1968: 409-410, アティーヤ 2014: 548) するナショナリズムにめざめた。

第二十六章においてはマロン派の信仰と文化について書かれている。これらがローマ・カトリックともアンティオキアとも共通した点を持つことが主に述べられる。またレバノンの文化がマロン派教会と密接に関わっていることも述べられる。

最後に第七部は、第二十七章として消滅した教会を取り上げ、第二十八章において結語として全体の総括を行っている。消滅した教会については、カルタゴ、ペンタポリス、ヌビアの三地域における東方キリスト教会の歴史が記されている。これらの地域は北アフリカに位置し、いずれもイスラームの台頭により教会が消滅している。次いで結語においては、東方キリスト教の諸教会が生き残ってきた理由を内的、外的それぞれの要因に着目し、記述している。内的要因としては「歴史を生き抜いてきた共同体の民族意識や特性」(Atiya 1968: 442, アティーヤ 2014: 591) により霊性が強化されたことによるとアティーヤは主張する。一方外的要因としては東方諸教会地域を占領していたムスリムがキリスト教徒を尊敬していたことにあるとアティーヤは捉える。しばしば行われた迫害は「常にどこか異常な君主の個人的な気紛れに端を発し、時にはムスリムとキリ

スト教徒の区別なく」(Atiya 1968: 443, アティーヤ 2014: 592) 行われたと彼は指摘する。また、エキュメニカルの可能性についても触れ、共通の「父」を戴く日を待望している、と締めている。

II. 本書を取りあげる意義

著者アティーヤの問題意識は、本書で取り上げられている東方キリスト教諸地域が長年研究対象としては十分に主題化されてこなかったこと、特に前章で紹介したように、著者アティーヤにとって最も関心のある東方諸教会に含まれる教会であるコプト正教会の位置が、キリスト教通史において長年輕視されてきたことに端を発する。この問題意識は彼が本書を執筆した 1968 年当時の状況を反映したものだが、2017 年現在も見受けられている。東方諸教会に関する研究について述べると、日本においても例えば「東方キリスト教圏研究会」が取り組んでいる²ように、教会毎には各々優れた研究が存在している。しかし、それぞれの教会間で使用される言語の差異や、各々の教会が受け入れている神学の差異が障壁となって、互いの研究の間での相互協力が十分に行われているとは言い難く、その全体像が掴みにくい。特に日本においては、先程述べた言語的要因の他にも、地理的にも遠く、当該地域で起こる事象が実生活に大きな影響を及ぼしているという実感が持ちにくく、また日本人にはなじみの薄いキリスト教やイスラム教などの宗教内部の問題に深く立ち入らなければならないこともあり、そもそも当該分野に関心がもたれること自体が少ないように思われる。しかし、近年の IS 等の問題に見られるように、今や日本にとっても当該地域で発生する問題を他人事で済ませることはもはやできず、東方諸教会の研究が急務になっていることは明らかである。

そして従来ではそれぞれの地域の教会について、歴史学的観点では歴史学に関する書物、教会史的或いは神学的な観点では当該地域のキリスト教に関する書物、また文学や美術の観点では、それらに該当する書物をそれぞれ別々に読まねばならなかったが、本書が日本語において出版されたことにより、日本人も網羅的に読むことがたやすくなった。本書はこれらの多岐にわたる情報を総合的に記述しているため、各教会が辿ってきた歴史や神学的傾向等の特徴を把握することが容易である。そして多岐にわたる参考文献が付されており、各教会の全体像を掴むことが可能であるように評者には見受けられる。また訳者である村山盛忠の翻訳も極めて明快で読みやすく、本書は日本語で読める東方諸教会の概説書として推薦に値する。

著者アティーヤは生前大学でイスラーム史などの教授を務めていた。このため中東世界に立脚した歴史家の視点でもって同書は書かれたと村山は述べている(アティーヤ 2014: 602)。また、アティーヤは教授としての職務の他に、エジプト・コプト正教会議員としても活動をしており、コプト正教会に属するキリスト教徒としての側面をも有している。そのためもあってか、コプト正教会に割かれた紙面の割合が他の教会に割かれている割合よりも大きい。また、訳者村山も日本基督教団の牧師としてコプト正教会に協力していたことがあり、両者ともコプト正教会に携わ

² <http://eoasoffice.webcrow.jp> (2017 年 3 月 20 日最終閲覧)

っていたことになる。村山はエジプトにいた頃、パレスチナ問題を目の当たりにし、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教のすれ違いを見てきた。そのこともあり、アティーヤ同様、エキュメニカルについての関心を抱き、本書の翻訳を手掛けたのであろう。

また、評者はキリスト教史研究というよりはむしろナショナリズム研究を専門としているが、本書の該当する地域における近代やそれ以前の時期の民族意識についても詳しく述べられていることにも着目したい。特にアティーヤが重点を置いて記述しているコプト正教会をはじめ、南インド・マラバル教会を除いた全ての東方諸教会地域において、ナショナリズムと宗教の関わりが見られる。これについては訳者である村山も「反皇帝派教会はおのずとナショナルな気運を生みだした」（アティーヤ 2014: 601）と訳者あとがきにおいて述べている。またアンソニー・スミスが『ネイションとエスニシティ』 (*The Ethnic Origins of Nations*) において本書を参考に行っている箇所 (Smith 1986: 233 他) もいくつか存在する。スミスはその著作において宗教と民族性の関係について触れていることもあり、本書を参考にしたと考えられる。ただアティーヤは自身の期待するエキュメニズムとナショナリズムとの関係性については述べておらず、あくまで歴史的事実に基づいた指摘を行っているのみである。また彼の言うエキュメニズムに関しても、教会の一致というよりはむしろカトリックなどとの対話や協力に重点が置かれており、東方諸教会における民族意識とは矛盾しない。

このように、東方諸教会についての概要を記した本書であるが、留意すべき点もいくつかある。一つ目には、教会史と地域史については概説的に記されているものの、キリスト教の中身の部分に関しては他の文献を参照する必要があることである³。特に非カルケドン派やネストリオス派が教理の面においてどのようにして異端として扱われていたのか、という点に関してはほとんど述べられていない。二つ目に、原書が出版された1968年から現在に至るまでの東方諸教会研究については他のものを参考にする必要がある。日本語文献では三代川寛子編著「東方キリスト教諸教会：基礎データと研究案内」などを参照されたい。ただし、全体としては東方諸教会の各々の歴史の概説書としてはよくまとまっている書物であると言えよう。

III. 総括

これまで『東方キリスト教の歴史』の書評を通じて、評者はアティーヤの主張するエキュメニカルへの期待と該当地域における民族意識の表れへの理解について述べてきた。アンソニー・スミスの著作においても見られるように、南インド・マラバル教会を除き、東方諸教会の教えが継承されている地域においては、宗教と民族ナショナリズムの結びつきが存在する。これらを客観的に見ながら研究を重ねることは、昨今のナショナリズム思想の顕在化を理解するためにも重

³ 日本語で読める文献のうち、東方教会におけるキリストの位置づけについては、J.メイエンドルフ著、小高毅訳 (1998) 『東方キリスト教思想におけるキリスト』教文館.を、初期キリスト教の教理についてはJ.N.D.ケリー著、津田謙治訳 (2010) 『初期キリスト教教理史上・下』一麦出版社.を参照されたい。

要であろう。また主に中東地域におけるキリスト教という特殊状況の把握も近年の中東情勢を考えるにあたって欠いてはならないものであると評者は考える。確かに他の東方キリスト教会や東方正教会においても、ギリシアやブルガリア等の例に見られように、自国に総主教座を構え、宗教と民族意識を結びつける事例があったが、これは近年に入ってからのものである。一方たとえばエジプトやアルメニアのように、近代以前から見られる民族意識についての研究はさほど見られない。本書を通して東方諸教会研究を志す研究者が日本に現れることを願いながら、今後の研究の進展に期待したい。

参考文献

- Krikorian, Mesrob K. (2010) *Christology of the Oriental Orthodox Churches: Christology in the Tradition of the Armenian Apostolic Church*, Bern: Peter Lang.
- Smith, Anthony D. (1986) *The Ethnic Origins of Nations*, Oxford: Blackwell Publishers.
- J.N.D ケリー著，津田謙治訳 (2010) 『初期キリスト教教理史 上・下』一麦出版社(原著：Kelly, John Norman Davidson (2000) *Early Christian Doctrines (5th Edition)*, London: Bloomsbury Academic.).
- J.メイENDORFF 著，小高毅訳 (1998) 『東方キリスト教思想におけるキリスト』教文館 (底本：John Meyendorff (1969) *Christ in Eastern Christian Thought*, Washington DC: Corpus Books.).
- 廣岡正久 (2013) 『東方正教会・東方諸教会 宗教の世界史 キリスト教史・3』山川出版社.
- 三代川寛子編著 (2013) 「東方キリスト教諸教会 基礎データと研究案内 (増補版)」『SOIAS research paper series, 9』上智大学アジア文化研究所イスラーム地域研究機構.
- 森安達也 (1978) 『キリスト教史 3 東方キリスト教 世界宗教史叢書 3』山川出版社.

参考 URL

<http://eoasoffice.webcrow.jp> (2017年3月20日最終閲覧)

(そが あつし 京都大学大学院文学研究科)